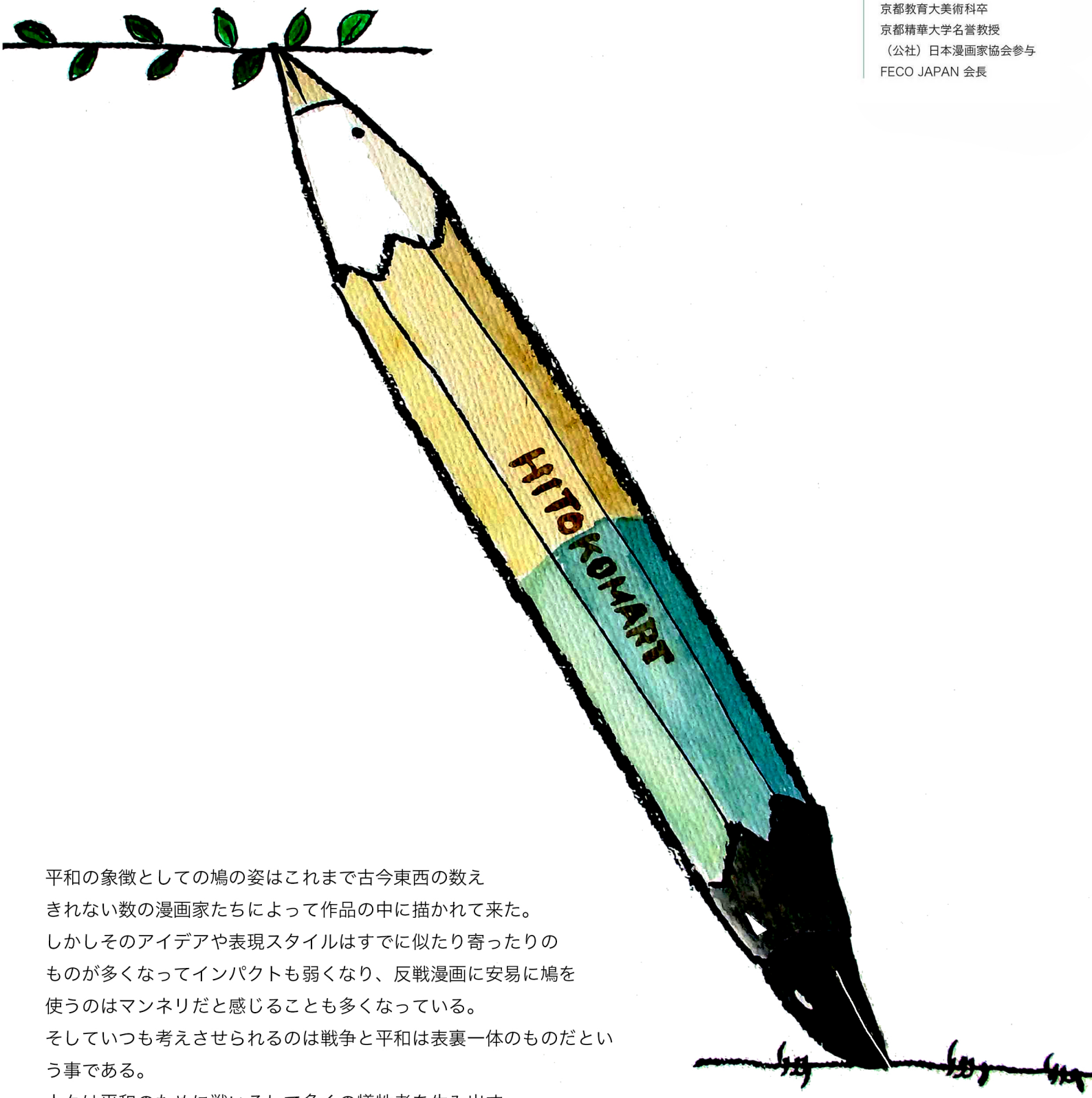
HITOKOMART No.20

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長



平和の象徴としての鳩の姿はこれまで古今東西の数え
きれない数の漫画家たちによって作品の中に描かれて来た。
しかしそのアイデアや表現スタイルはすでに似たり寄ったりの
ものが多くなってインパクトも弱くなり、反戦漫画に安易に鳩を
使うのはマンネリだと感じることも多くなっている。
そしていつも考えさせられるのは戦争と平和は表裏一体のものだとい
う事である。
人々は平和のために戦いそして多くの犠牲者を生み出す。
自国の正義のための殺人は無くならない。

ハトの思い

大学生の頃に『ベトナム』というドキュメント映画を京都の祇園会館で観た記憶がある。
学生運動やベ平連には全く無関係な制作一筋の生活を送っていた私だったが当時の若者の多くは誰もがベトナム戦争をスルーしてはいけない気持ちを持っていたのだ。
その日の館内は学生運動とは関わりの無いようなごく普通の若者も多く、立ち見の人も出て異様な熱気にあふれていた。
当時すでに１コマ漫画を新聞で連載し始めていたボクも1市民の立場からベトナム戦争や学生運動をモチーフに何枚もの漫画を描いていたが、不思議な事にオリーブの葉をくわえたハトが登場する漫画を描いた記憶はない。
フォークソングブームのあの頃、西岡たかしさんの『血まみれのハト』という歌を歌っていたぐらいだ。
ちょうど今から55年前の事である。

テロリスト

旅立ち

『戦争を知らない子どもたち』は70年代のジローズのヒット曲だ。戦後の平和な日本で生まれ育った団塊世代の若者の歌だが、その若者たちはすでに後期高齢者になった。
1970年万博のテーマ『人類の進歩と調和』は今も高齢の日本人の頭に刻み込まれている。
当時大学生だった私は月の石も人間洗濯機も全く興味なく、唯一、万博美術館だけは見ておこうと思い、それだけを見て帰ってきた。あの時、他の展示をもっと見ておけば良かったという後悔は今もまったく無いし、その後の人生に何のマイナスも感じていないから今回の万博にも全く興味がない。
まさに『万博を知らない高齢者』である。

メンテナンス

いつの間にか平和の使者にされてしまった鳩たちは毎日がプレッシャーにのしかかられる毎日ではなかったろうか。
たまにはオリーブでなく薔薇のような赤い花をくわえてカルメンの如くポーズを決めてみたり、木枯し紋次郎のように楊枝をくわえて「あっしにゃア関わりあいのねエ事で」と言ってみたいのではないかと意地悪く考えてしまうのである。

うなづく人々

スマホは今や日常生活に不可欠なアイテムになった。
電車内では殆どの人はスマホを見つめているし街中の歩きスマホも珍しくない。
あらゆる個人情報が詰め込まれた物なのに忘れ物、落とし物が多いのも不思議である。
生活の殆どの作業をこれ一つで済ますことができるのは便利なのだがこれが無いと何もできなくなってしまうのも恐ろしい。
そして唯一の欠点は充電が切れればタダの鉄の板になってしまう事だろう。
今後は是非とも高性能の太陽電池内蔵のスマホが欲しいところだがメーカーさんはすでに考えてくれてるのかな。
私が生まれた翌年の１９４９年に発売されたという玩具「水飲み鳥」はコップの水がある限り動き続けるという優れものなんだけれどね。

タップ鳥

ヒラキ

鼻マクラ

ちょっと一服

飛び出す絵本

ゴジラと出会った頃

『ゴジラ』を初めて映画館で見たのは公開が1954年11月だから、私はまだ小学校に上がる前だった。家から歩いて行けるところに大きな映画館があって、封切り前から掲げられた大きな手描きの看板や映画ポスターのゴジラの姿には恐怖感と好奇心が入り混じって何度も映画館前に貼られたモノクロのスチール写真を背伸びしながらのぞき込んでいた思い出がある。

当然の事だが当時の子供たちは今の子どもがピカチュウを描けるのと同じように誰もがゴジラの絵を描いた。

今第１作の映像を見るとそれは特撮としてはまだまだ稚拙なものだったが、その後の数々のゴジラ映画や最新の緻密なCG作品を観てもあのモノクロの暗い画面に浮かぶ第１作の姿に感じたドキドキ感は得られない。

続いて作られたラドンやアンギラスといった怪獣にも懐かしさはあるが彼らはやはり脇役でしか無い。

今も私の部屋のDVDの棚にはゴジラ第１作がいつでも観れるような位置に並んでいる。